

児童における共感と向社会的行動の関係

桜井 茂 男*

THE RELATIONSHIP BETWEEN EMPATHY AND PROSOCIAL BEHAVIOR IN CHILDREN

Shigeo SAKURAI

The purpose of this study was to develop the Empathy Scale for Children (ESC) and to examine positive relationship between prosocial behavior and empathy measured by ESC. In Study I, the Empathy Scale for Children (ESC), a new self-report measure of empathy in Japanese children, was constructed according to Bryant (1982) and Kato and Takagi (1980). It was administered to 179 fifth and sixth graders; the factor analysis revealed single-factor solution. This scale was also found to have sex difference and high reliability. In Study II, ESC, Sakurai's (1984) Social Desirability Scale for Children (SDSC), and prosocial behavior inventory using method of peer nomination were administered to 156 fifth and sixth graders and the relationships were examined. The partial correlation coefficient between ESC and total prosocial behavior points controlled by SDSC and sex was significantly positive and it supported the hypothesis.

Key words: empathy, prosocial behavior, sex difference, social desirability, children.

近年、向社会的行動 (prosocial behavior) を動機づける要因、そしてまた、いじめのような攻撃行動を抑制する要因などとして、共感 (empathy) が注目されている。共感とは Feshbach によれば、「他者の情動的反応を知覚する際に、その他者と共有する情動的反応」(菊池, 1983) と定義される。一方、向社会的行動は、Mussen & Eisenberg-Berg (1977) によれば、「外的な報酬を期待することなしに、他者や他の人びとの集団を助けようとして、こうした人びとのためになることをしようとする行動」と定義されている。

欧米では、既述したように、共感と向社会的行動の有機的な関係を予測し、その検討を試みた研究は多い。代表的なものとして、Mehrabian & Epstein (1972) は、

大学生を対象に、共感 (情動的共感: emotional empathy) を測定する33項目の質問紙を作成し、これと援助行動および攻撃行動との関係を分析した。その結果、尺度得点には性差が認められ、女性の方が男性よりも共感的であること、共感得点の高い人は低い人よりも、援助行動が多く、攻撃行動が少ないこと、などが明らかにされた。また、Sawinら (1980)** は、児童を対象に、Feshbach & Roe (1968) の affect-matching method*** により共感を測定し、これと寄付行動との関係を検討した。この研究では、共感と向社会的 (寄付) 行動の正の関係が支持されなかったが、その原因として、affect-matching method による共感測定の妥当性の問題や、寄付行動測

* 日本学術振興会 特別研究員 (筑波大学心理学系)
(Junior scientists fellow in the Japanese Society for the Promotion of Science (Institute of Psychology, University of Tsukuba))

** Moore & Eisenberg (1984) より引用した。

*** 悲しみ、喜び、驚き、恐れ の4つの情緒を経験する主人公の物語をナレーション付きのスライドで呈示し、物語を聞いた後の被験者の情緒を問うことにより、共感を測定する方法である。この簡略法がよくもちいられる。

定場面における人工性の問題などが指摘できる。これらの他、言語報告に基づいた測定ではなく、非言語的な表情やジェスチャーに基づいて測定された共感と向社会的行動との正の関係も検討されている (Moore & Eisenberg, 1984)。

一方、本邦においても、最近、共感と向社会的行動との関係を扱った研究は増えてきたように思われる。高木 (1976) は、大学生を対象に、既述した Mehrabian & Epstein の共感尺度の日本語版を作成し、これと実験場面における援助行動との関係を検討した。その結果、両者に有意な関係は認められなかった。仮説が支持されなかった原因として、直訳された共感尺度の項目に、日本人には必ずしもふさわしくない内容が含まれていたことが考察された。また、首藤 (1985) は、児童を対象に、VTR によりある犠牲者の悲しみの場面を呈示した後、被験児の顔の表情より共感を測定し、これと分与行動との関係を検討した。その結果、両者の間の正の関係は、支持された。この他、幼児を対象にした研究 (川島, 1980; 浜崎, 1983) でも、仮説は支持されている。しかし、本邦における共感と向社会的行動との関係を検討した研究には、児童を対象に、質問紙法で個人差としての共感を測定し、それと向社会的行動との関係をみた研究はみあたらない。

そこで、本研究では、この点を考慮して、Bryant (1982) が作成した児童・生徒用の共感測定尺度や加藤・高木 (1980) が作成した成人用共感測定尺度などを参考に、本邦の児童に適した自己報告型の共感測定尺度を作成し (研究 I)、これまであまり取り上げられなかった学校生活場面における向社会的行動との関係を検討する (研究 II) ことを目的とする。

研究 I

目的

児童用の共感測定尺度 (Empathy Scale for Children: ESC) を作成し、その信頼性を検討する。

方法

被調査者 茨城県下の公立 A 小学校の 5 年生 98 名 (男子 49 名, 女子 49 名) と 6 年生 81 名 (男子 46 名, 女子 35 名) の合計 179 名であった。手続 Bryant (1982) および加藤・高木 (1980) の共感測定尺度を参考に、23 項目からなる ESC 項目原案が作成された。回答形式は、「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の五段階評定で、得点化は項目ごとに共感の高い反応から、5, 4, 3, 2, 1 点とした。原案 23 項目のうち、逆転項目はほぼ半数の 10 項

目であった。ESC 原案は、上記の被調査者に対して、1984 年 2 月上旬、放課後の時間を使い、クラスごとの集団で実施された。調査者は、各クラスへ行き、回答方法などを詳しく説明した後、各自自由に回答するように教示した。回答時間は、20 分ぐらいであった。2 週間後、再検査法による信頼性の検討のために、同じ質問紙が 5 年生 42 名 (男子 20 名, 女子 22 名) に再実施された。

結果と考察

全 23 項目で、項目一全体相関係数を求め、0.1% 水準で有意な相関をもつ項目を最終的な ESC 項目とした結果、TABLE 1 に示されている 20 項目が残された。20 項目のうち、逆転項目は、7 項目であった。

各項目の平均、標準偏差および 20 項目での項目一全体相関係数は、TABLE 1 に示されている。項目平均は 3.00~4.52 の範囲にあり、やや高得点側に偏っている。項目の標準偏差は 1.04~1.48 の間にある。項目一全体相関係数は .42~.62 ($p < .001$) であり、かなり高い相関が認められる。ESC 20 項目による尺度得点の平均は 74.03、標準偏差は 12.82、範囲は 26~100 であった。

男女別に尺度得点の平均を求めると、男子は 67.44 ($SD=11.81$)、女子は 81.49 ($SD=9.42$) で、 t 検定 (Welch の法) の結果、女子の方が男子より有意に高得点であった ($t(175.21)=-8.84, p < .001$)。このような性差は、Mehrabian & Epstein (1972) や加藤・高木 (1980) の大学生を対象とした共感測定でも認められており、本結果をあわせて考えると、女子の方が男子よりも共感的であるという性差は、早くも児童の頃より生じているといえよう。

つぎに、ESC 20 項目で因子分析が行われた。主因子法による因子抽出の結果、第 1 因子が全分散の 27.3% (固有値 5.46) を説明し、第 2 因子の 8.3% (固有値 1.66) に比べると、きわめて大きな寄与率を示した。さらに、第 2 因子以下の寄与率の変化に大きなギャップがなかったため、本尺度はほぼ単因子構造であると判断した。高木 (1976) や加藤・高木 (1980) の場合には、2 つあるいは 3 つの因子が抽出されており、成長とともに共感の概念も分化していくことが予想される。

信頼性は、2 つの方法で検討された。1 つは、内的一貫性を推定するクロンバックの α 係数で、.85 とかなり高かった。もう 1 つは、再検査 (2 週間後) 法による安定性係数で、これも .87 ($N=42$) と十分高い値であった。両指標とも、Bryant (1982) の場合より高く、より高い信頼性が確認された。

TABLE 1 ESC 20 項目の平均, 標準偏差と項目—
全体相関係数

No. 注1)	項 目 注2)	M	SD	項目— 全体相関
1.	だれとも遊べないで、ひとりぼっちでいる子を見ると、かわいそうになります。	4.17	1.07	.62
2.	うれしいのに泣く子は、おかしいと思います。(R)	3.64	1.36	.51
3.	たとえ自分はプレゼントをもらわなくても、他の人がもらったプレゼントをひらくのを見ると、楽しくなります。	3.59	1.28	.49
4.	泣いている子を見ると、自分までなんだか悲しい気持ちになります。	3.03	1.31	.60
5.	けがをして苦しんでいる子を見ると、とてもかわいそうになります。	4.23	1.09	.62
6.	友だちがニコニコ笑っていると、自分までなんとなく楽しくなります。	3.85	1.20	.55
7.	悲しいドラマ(げき)をみていると、つい泣いてしまうことがあります。	3.31	1.47	.61
8.	動物がきずついて苦しそうにしているのを見ると、かわいそうになります。	4.52	1.04	.56
9.	とても悲しい気持ちにするような歌があります。	3.00	1.46	.43
10.	犬やねこを人間と同じようにかわいがる人の気持ちは、わかりません。(R)	4.27	1.23	.48
11.	友だちがいけない子は、友だちがほしくないのだと思います。(R)	4.13	1.20	.43
12.	悲しい物語や映画を見ていて、泣くようなことはありません。(R)	3.54	1.48	.51
13.	おやつを食べているとき、そばにいる子がほしそうにしているでも、自分でぜんぶたべてしまうことができます。(R)	3.39	1.35	.48
14.	きまりをやぶって先生にしかられていた友だちを見て、かわいそうとは思いません。(R)	3.02	1.17	.40
15.	身よりのない老人を見ると、かわいそうになります。	4.01	1.11	.47
16.	まわりの人がなやんでいても、平気でいられます。(R)	3.76	1.06	.52
17.	友だちがいじめられているのを見ると、はらがたちます。	3.72	1.18	.42
18.	小さい子はよく泣くが、かわいいと思います。	3.50	1.36	.44
19.	元気のない子を見ると、心配になります。	3.51	1.25	.59
20.	ある歌をきくと、とても楽しい気持ちになります。	3.83	1.24	.61

注1) ○は、研究Ⅱで構成された ESC-II の項目であることを示す。

注2) (R)は逆転項目であることを示す。

研究Ⅱ

目的

研究Ⅰで作成された ESC を用いて、児童の共感と向社会的行動との関係を検討する。その際、自己報告型の質問紙に混入しがちな社会的望ましき(social desirability)

を同時に測定し、これを考慮したより正確な共感と向社会的行動との関係も分析する。

方法

被調査者 茨城県下の公立M小学校の5年生3クラス84名(男子42名, 女子42名)と6年生2クラス72名(男子39名, 女子33名)の合計156名であった。手続 1984年2月下旬, 上記被調査者に対して, 放課後の時間を使い, クラスごとの集団で, ESC, 児童用社会的望ましき測定尺度(桜井, 1984), 向社会的行動質問紙(Prosocial Behavior Inventory: PBI)が実施された。ESCは, 研究Ⅰで作成された共感測定尺度である。児童用社会的望ましき測定尺度(Social Desirability Scale for Children: SDSC)は, 桜井(1984)により作成された社会的望ましきを測定するための尺度であり, 「はい, いいえ」型の回答形式を採用し, 25項目で構成されている。項目ごとに, 社会的に望ましい方向に反応した場合, 1点が与えられる。したがって, 高得点ほど社会的に望ましい反応傾向が高いといえる。向社会的行動質問紙(PBI)は, クラスごとに, そのクラスにおいて, 向社会的行動をよくする友だちを, peer nominationにより抽出し, 得点化する質問紙である。質問項目は, (1)元気のない人を, よく心配してくれる人はだれですか(心配項目), (2)自分かつてなことをしないで, みんなと協力できる人はだれですか(協力項目), (3)こまっている人をみると, よく助けてあげる人はだれですか(援助項目), (4)小さい子どもや弱い子の世話をする人はだれですか(世話項目), の4つであった。これらの質問に対して, クラスの友だちの中から, あてはまる友だちの名前を男女2名ずつ書くようになっていた。ただし, 同じ友だちの名前を何回書いてもよいし, あてはまる友だちがいけない場合には, 書かなくてもよいことになっていた。得点化は, 書かれた名前1つにつき, その名前の子に1点を与える方法が採用された。したがって, 高得点ほど向社会的行動が多いことを示す。なお, 質問紙の実施方法は, 研究Ⅰと同じであり, 3つの質問紙への回答には, およそ30分を要した。

結果と考察

ESC および SDSC の尺度得点の平均は73.94 ($SD=12.95$), 12.59 ($SD=5.48$) であった。これらの値は, 研究Ⅰおよび桜井(1984)の結果と類似している。

つぎに, PBI の項目間の相関係数を求めたところ, .34~.78 ($p<.001$) であり, これらの値はかなり高く, 全体(合計)得点を算出することには意味があると判断される。PBI の項目平均は, 心配項目で1.71 ($SD=2.28$), 協力項目で1.78 ($SD=3.15$), 援助項目で1.42 ($SD=2.03$), 世話項目で1.09 ($SD=1.47$) で, これら4項目の全体得

TABLE 2 共感得点と向社会的行動の相関係数

向社会的 行動	ESC	ESC・C ^{注1)}	ESC-II	ESC-II・C ^{注2)}
心配	.26**	.20*	.22**	.18*
協力	.22**	.16*	.18**	.16*
援助	.30**	.21*	.26**	.18*
世話	.24**	.16*	.23**	.16*
全体	.30**	.21*	.25**	.20*

注1) 性と社会的望ましさの要因をコントロールした偏相関係数を示す。

注2) 性の要因をコントロールした偏相関係数を示す。

** $p < .01$, * $p < .05$

点では6.01 ($SD=7.54$)であった。平均に比べて標準偏差が大きいのは、peer nominationから得点化を試みているためであろう。男女別に項目平均を比べると、援助項目 ($t(154)=-2.61, p < .05$) および世話項目 ($t(154)=-2.60, p < .05$) に女子の方が高得点である性差が認められ、その結果、全体得点にも同様の性差が認められた ($t(154)=-2.17, p < .05$)。これらの結果は、以下の分析で性の要因をコントロールする必要性を示唆している。

ESC への社会的望ましさの混入の程度を見るために、ESC 尺度得点と SDSC 尺度得点との性の要因をコントロールした偏相関係数* を求めたところ、.29 ($p < .01$) と有意であったため、ESC の各項目と SDSC との性の要因をコントロールした偏相関係数を求め、有意でない ESC 項目で、ESC-II の構成を試みた。その結果、TABLE 1 に示されている 9 項目が残った。ESC 20 項目と ESC-II 9 項目との相関係数は .89、ESC-II の α 係数は .71、ESC-II と SDSC との相関係数は .10 (n.s.) であった。ただし、ESC-II は 9 項目と項目数がかなり少ないので、その点を考慮して、PBI との相関は ESC と ESC-II の両方で検討することにした。

ESC および ESC-II の尺度得点と PBI の項目得点および全体得点との相関係数が算出された。結果は、TABLE 2 に示されている。PBI の全体得点でみると、性や社会的望ましさの要因がコントロールされても、共感と向社会的行動との相関係数は .20 程度 ($p < .05$) であり、有意な正の相関が認められた。この値は必ずしも高いとはいえないが、Mehrabian & Epstein (1972) の結果を児童の場合にも支持したといえよう。同じく、PBI の全体得点における相関係数では、性、社会的望ましさという要因がコントロールされるたびに、相関係数が .05 程度ずつ低くなっている。また、PBI の項目ごとに見ると、相関係数は心配および援助項目でやや高いとい

* ESC および SDSC の性差を考慮した。

えよう。

全体的考察

本研究では、研究 I で ESC という信頼性の高い児童用の共感測定尺度が作成され、研究 II でこの尺度を用いた共感と向社会的行動との関係が分析された。その結果、性や社会的望ましさの要因を取り除いても、共感と向社会的行動との間には、.20 程度の有意な正の相関が認められ、仮説は支持された。しかし、この相関係数は必ずしも高いとはいえず、今後より詳細に検討する必要がある。

さらに、本研究に基づく今後の課題としては、ESC の妥当性の検討がある。すでに、その先駆けとして、著者は、攻撃性を測定する質問紙を作成して、それと ESC との相関を検討している。その結果、-.13 ($p < .05$) という有意な負の相関がえられた。また、同時に測定された教師評定による攻撃行動とも、-.17 ($p < .05$) という有意な負の相関がえられた。しかし、これらも十分とはいえず、広い観点から妥当性を検討する必要がある。

また、研究 II における ESC と社会的望ましさを測定する SDSC との相関分析の結果では、有意でない項目が 9 項目と全体の半分以下になってしまい、単独に使用する場合、9 項目では項目数が少ないように考えられる。今のところは、ESC 20 項目と SDSC を併用することにより、社会的望ましさを考慮して研究を進めることが可能であるが、将来のことを考えると、社会的望ましさが混入しない、しかも項目数の多い新しい共感測定尺度の開発が必要であろう。そのためには Davis (1983) の多次元共感尺度などが参考になると思われる。

引用文献

- Bryant, B.K. 1982 An index of empathy for children and adolescents. *Child Development*, 53, 413-425.
- Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Feshbach, N., & Roe, K. 1968 Empathy in six and seven-year-olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- 浜崎隆司 1983 幼児の分与行動におよぼす共感性、他者存在の効果 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 498-499.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感

- 性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33—42.
- 川島一夫 1980 幼児の寄付行動における共感と他者存在の影響 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 408—409.
- 菊池章夫 1983 向社会的行動の発達 教育心理学年報, 118—129.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525—543.
- Moore, B.S., & Eisenberg, N. 1984 The development of altruism. G.E. Whitehurst (Ed.) *Annals of child development*. JAI Press.
- Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping: the development of prosocial behavior in children*. W.H. Freeman.
- 桜井茂男 1984 児童用社会的望ましき測定尺度 (SDS C) の作成 教育心理学研究, 32, 310—314.
- 首藤敏元 1984 子どもの共感と愛他行動に関する研究——犠牲者の悲しみの共感が分与行動に及ぼす効果 日本心理学会第48回大会発表論文集, 566—567.
- 高木秀明 1976 情動的共感性と援助行動の関係に関する研究 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 448—449.

(1986年5月22日受稿)